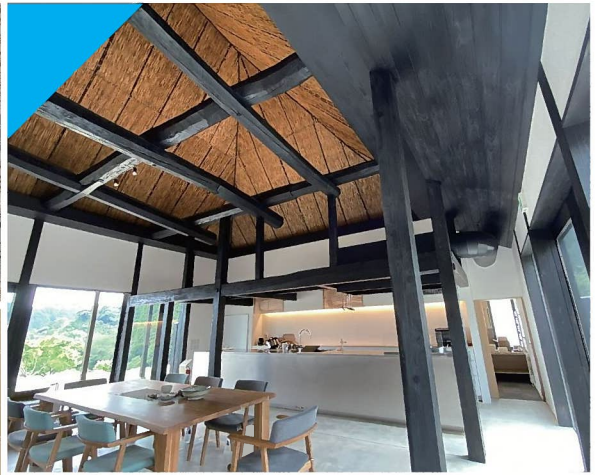




2021第8回福岡県 木造・木質化建築賞



ご挨拶

森林は、再生可能な資源である木材の生産だけでなく、豊かな水や空気の供給、土砂災害の防止、二酸化炭素の吸収による地球温暖化の緩和など、さまざまな面から私たちの安全・安心な暮らしを支えています。

この森林の恵みを持続的に享受していくためには、森林の適正な整備・保全を続けながら利用期を迎えた森林資源を有効活用する、「伐って、使って、植える」サイクルを維持する必要があります。

このため、県では公共建築物などの木造・木質化を積極的に進めており、昨年3月にリニューアルした県庁地下食堂「けんちょう Food Marche (フードマルシェ)」では、早生広葉樹として注目されている県産のセンダンを用いた大川家具のテーブルや椅子を導入するなど内装を木質化しています。また、令和3年度は、ウィズコロナ社会に対応した木質リノベーションを推進し、多くの店舗やオフィスにおける内装の木質化や木製家具の導入を支援して



福岡県知事
服部 誠太郎

いるところです。

これらの取り組みに加え、木造・木質化を進める上でモデルとなる優れた建築物を毎年表彰している「福岡県木造・木質化建築賞」も、今年で第8回を迎えました。

今回も、住宅やオフィス、幼稚園など幅広い分野から応募いただき、選考委員会の厳正な審査を経て、大賞2点、優秀賞4点、特別賞2点、奨励賞2点、計10点を「福岡県木造・木質化建築賞」に決定しました。受賞された建築物は、いずれも木の持つ温かみや木目の美しさといった、木材ならではの特長を生かした素晴らしいものです。近くにお越しの際にはぜひともこれらの建築物をご覧になり、木材の良さを感じていただきたいと思います。

県では、引き続き、県産木材の需要拡大に向けた取り組みを進めてまいります。今後とも、皆さまのご支援、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

結びに、選考委員の皆さまのご尽力に深く感謝申し上げますとともに、受賞者ならびに応募いただいた皆さまのますますのご健勝とご活躍をお祈り申し上げます。

総評

2021年は新型コロナウイルス感染拡大で延期されていた東京オリンピック、パラリンピックが開催されました。変異株が次々に出現して収束が見通せない中、無観客や様々な感染対策を駆使した取り組みは、withコロナを生き抜く一筋のひかりを見たチャレンジ

だったと思います。全世界を見ても対応策は様々ながら、情報を共有しながらの世界的な団結行動はこれまで記憶になかったことです。奇しくも長年世界的な課題とされてきた地球温暖化対策を協議するCOP26が同年11月開催されました。産業革命前からの気温上昇幅を1.5℃に抑えるため、世界の二酸化炭素排出量を大幅に削減する必要があり、その重要な対策として森林破壊の防止に関する声明が発出されています。未来の世代に配慮したこの温暖化対策は新型コロナウイルス対策同様、森林破壊が進む途上国だけでなく地球規模のワンチームでの取り組みが期待されるとともに達成可能であると確信しています。木造・木質化建築も都市部に二酸化炭素を固定、貯蔵することになり、森林破壊防止と同様に重要な環境対策です。本建築賞はデザインや生活環境の向上はもとより、地球環境保全にもつながるものと考えています。



福岡県木造・木質化建築賞
選考委員会
委員長 藤本 登留

今回の第8回福岡県木造・木質化建築賞の選考では38点の応募があり、保育施設が16点、戸建て等住宅が10点、事務所が5点、その他店舗、宿泊施設、バス待合所、大学売店施設など多様な建築作品が見られました。この中にはRCなど非木造建築が10点ありましたが、いずれも内外装などに木材を使用した魅力的な作品でした。

第1次選考は、6名の選考委員によって書類審査を実施し、協議および投票によって10点を最終選考の対象建築物に選出しました。

最終選考は、2日間にわたり実施しました。10点の対象建築物を現地審査したうえ、最終選考委員会で協議および投票によって木造の部、木質化の部の大賞各1点、優秀賞各2点のほか、特別賞2点、奨励賞2点の全10点が受賞建築物に決定しました。木造の部の大賞は、オーガニック製品の製造販売を手掛ける事務所、社風そのままにサステナブルな社会を意識した伝統構法の木造建築物です。木質化の部の大賞は、木を内装や家具にふんだんに使用した暖かみある幼稚園型認定こども園です。受賞作品はいずれも地球環境、森林環境、地域経済、居住環境、さらに次世代を担うこども達のための環境づくりを指向した木の使い方を教えてくれています。

最後に、審査にご協力いただいた皆様に心から感謝申し上げます。

福岡県木造・木質化建築賞

表彰の目的

県では、県産木材の需要拡大の推進をより一層図るため、県民の皆さんや建築関係の方々に対し、木造・木質化に優れたモデル的な建築物を紹介し普及啓発することを目的に、本賞を実施しています。

賞の対象

福岡県内の、公共建築物や店舗・住宅等の木造・木質化を推進するにあたり、モデルとなる優れた建築物

賞の部門

- 木造の部(大賞・優秀賞) ●木質化の部(大賞・優秀賞)
- 特別賞 ●奨励賞

主な選考基準

- 国産材を創意工夫により活用し、林業振興に寄与しているもの
- 木材の特徴や良さを活かし、建築物の木造・木質化に波及効果があるもの

選考委員

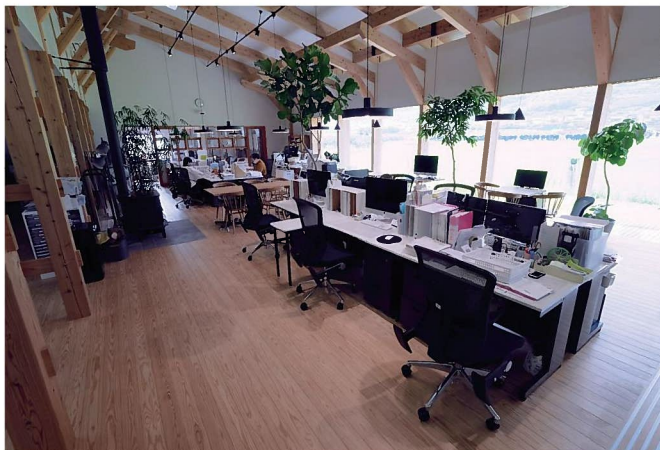
役職	氏名	職名
委員長	藤本 登留	九州大学農学研究院准教授
副委員長	大森 洋子	久留米工業大学 建築・設備工学科教授
委員	工藤 卓	元近畿大学産業理工学部 建築デザイン学科教授
委員	松尾 智昭	(一社)福岡県木材組合連合会 専務理事
委員	岩尾 款	西日本新聞社編集局クロスメディア報道部 デスク兼記者
委員	佐伯 亮俊	福岡県農林水産部林業振興課長

木造の部 大賞

門司
港駅

株式会社 Kotori works 事務所

所在地：うきは市



建 築 主 | 株式会社 Kotori works

設 計 者 | 有限会社建築工房悠山想一級建築士事務所 代表取締役 宮本繁雄

施 工 者 | 有限会社建築工房悠山想 代表取締役 宮本繁雄

建築物の用途 | 事務所

構造・規模(階数) | 木造・地上2階

延 床 面 積 | 496.86㎡

設計趣旨

この建物はオーガニックにこだわった製品製造、販売業務をしている会社Kotori worksの事務所である。そのこともあり環境に配慮した伝統構法としている。素材と技術は出来る限り地元の職人技術と材を活かすとともに、市場で流通している製材品を使いコスト削減を目指した。構造は木造で伝統的な持ち送りと方杖工法により、全体で8間のスパンの空間を作り出している。また、この地が南に耳納連山、果樹園、田園、敷地の北側には流川の桜並木という自然豊かな環境にあり、その中に馴染む外観を意識し、近郊の集落に焼杉板を張った民家があることから外壁は焼杉板張りを採用した。

炭素貯蔵効果の高い木材利用と土壁等の基本的には土に還る材の使用、地元職人の手仕事という伝統的な構法は、脱炭素社会、持続可能な社会という命題の中で、もう一度見直していいのではないかと考えている。

講 評

天然繊維によるオーガニック製品の製造・販売を手掛ける会社の事務所です。環境共生型でサステナブルな社会につながる仕事で、そこに適した建築として木造伝統構法が採用されており、地域内の一般製材品を活用し、地元の職人技術により造り出されています。遠方へ部材を運搬して加工することもなく地域内で作り上げられたこの建築は、地域経済に貢献し、二酸化炭素排出も低減できる取り組みであると評価できます。伝統の木組みで金属金具をほとんど使わない点は、部材製造時のCO₂排出だけでなく、解体廃棄時の分別やりサイクルでも多くの利点が考えられます。天然乾燥や低温乾燥材は、高温乾燥では不可能に近い手刻みによる仕口、継手加工ができ、自然に近い木の香り、材色、調湿機能、触れたときの温かみなどの良いところがあります。スギの厚板フローリングは、冬、素足でも冷たさを感じません。土壁は保温、調湿が期待できます。外壁は保存処理として現地加工した焼杉板が使用され、その炭色壁面はモダンな外観表情を造っています。

木質化の部 大賞

幼稚園型認定こども園 おひさま くるめようちえん
所在地:久留米市



写真撮影:タナカ写真スタジオ(田中太)

建築主 | 幼稚園型認定こども園 おひさま くるめようちえん 園長 鐘ヶ江文子
設計者 | 株式会社象設計集団 代表取締役 二宮郁代
施工者 | 株式会社イノウエハウジング 代表取締役社長 井上正通
建築物の用途 | 幼稚園型認定こども園
構造・規模(階数) | 木造・地上1階(一部2階)
延床面積 | 762.61㎡

設計趣旨

創立115年を迎えた歴史ある幼稚園で、子どもたちの自発性・自主性を尊重し、日常の遊びを通じた体験から、自ら学び成長していくことを大切にしている。元はRC造2階建て、均質な教室が並ぶ構成であったため、新園舎では、建物自体に拠りどころがたくさんあるような、空間の多様さや心地よい居場所が求められた。

平屋を基本とした、管理部門の「大人の家」、乳児の「小さなうち」、幼児の「大きないえ」の3つ「家」からなる、のびやかな構成とし、保育室同士の行き来のため、それぞれの「家」を外廊下でつないだ。外気に開放されているが屋根があり室内的にも使える。外廊下からは敷地を南北に貫く中庭に出ることができ、自然と屋内から屋外へとつながる。時々刻々と変化する外の環境は、子どもたちにさまざまな発見、体験をもたらしてくれる。

講評

主に一般流通材を使用し、在来工法で設計された木造の園舎です。こども達のための多様なスケール感をもつ居場所が木の魅力ふんだんに造り上げられています。幼稚園棟、保育園棟などを500㎡以下にすることで非木造の防火区画を要しない、さらにこれら保育室をすべて1階にすることで耐火、準耐火建築にする必要もない建築としています。このような制限を排除したことで、こどもたちの触れる床、壁、柱などにスギ、ヒノキなどの温かみある木を採用することを可能にしています。幼稚園棟保育室では磨き丸太の柱や小屋組みをあらわして使っています。その設計では流通材が使用できるように最大6m部材としています。保育棟は内装制限が適用されますが、腰壁や建具や家具など、園児が触れるとこ可能な限り木が使われています。多様な性格を持った子どもたちを温かみあふれる木が包み込んでくれて、感性豊かな子供たちの育成を後押ししてくれている園舎です。



写真撮影:タナカ写真スタジオ(田中太)



写真撮影:タナカ写真スタジオ(田中太)

木造の部 優秀賞

奥八女焚火の森キャンプフィールド

所在地：八女市



建築主 | 八女市
設計者 | 株式会社環・設計工房 代表取締役 杉本泰志
取締役 鮎川透、取締役 石橋光男
株式会社川崎構造設計 代表取締役社長 川崎薫
三宅唯弘建築設計事務所 代表 三宅唯弘
施工者 | 株式会社黒木建設 代表取締役 服部伸文
オオキタ建設株式会社 代表取締役 北島正道
大坪建築株式会社 代表取締役 大坪陽一
株式会社吉田ボーリング工業
合資会社柴尾電気商会
建築物の用途 | 事務所兼物品販売店舗 / 宿泊施設
構造・規模(階数) | 木造(在来工法)・地上1階
延床面積 | 784.72㎡

設計趣旨

平成24年九州北部豪雨災害によって大半が流出した「きのこ村キャンプ場」の復興事業として整備が行われた。「谷あいの暮らし(木のあるくらし・火のあるくらし・川のあるくらし)」を表現することがテーマとなった。

八女市は杉材の産地としても有名であり各建物の構造材から仕上材に至るまで、八女産材を使用している。特にキャビンとコテージで使用した磨き丸太は、笠原地区で伐り出した杉を使用しており、地域の山の恵みをその地で活用している。

山に囲まれ燃料となる薪が調達しやすい笠原地区では、薪ストーブや焚火台、囲炉裏、かまどが生活に溶け込んでいる。キャンプフィールド内にも焚火台や薪ストーブを多数配置し、火を囲むシーンを随所に設けた。

敷地を流れる笠原川の北側には管理棟、宿泊棟、フリーサイト、南側にはサニタリー棟、広葉樹の森の中腹にプッシュサイトを配置。各エリアから笠原川を眺めることができ、管理棟には笠原川を眺めながら地域のお茶を味わえる八女茶カフェを配置している。

木造の部 優秀賞

虹の森保育園

所在地：福津市



建築主 | 社会福祉法人悠信福祉会 理事長 城後哲志
設計者 | 株式会社環・設計工房 代表取締役 杉本泰志
施工者 | 因建設株式会社 代表取締役 因善嗣
建築物の用途 | 保育園
構造・規模(階数) | 木造・地上1階
延床面積 | 853.54㎡

設計趣旨

子どもを守り、包み込む空間を木でつくるにあたり、「木ならではの自然なたち・曲線を活かす」ことをテーマに部材構成等考えた。

玄関部分は根元の広がった丸太柱や耳付き木天板をシンボリックに用いることで、木の自然な形に包まれた訪れた人を迎える空間とした。丸太柱は構造的強度を求めず、これ無しで成立する架構として設計したところに、化粧材として挿入している。木格子部分は耐震壁となっており、園庭への見通しと構造耐力を両立させている。

遊戯室は天井高7m超の空間に対し、木を感じさせる湾曲した太鼓梁を表しにして見せ、建物のシンボリックな部分としてつくった。さらにハイサイドライトで上方からの光によりその梁の姿を照らすことで、木の自然な形状や質感がユーザーに伝わる空間構成を目指した。

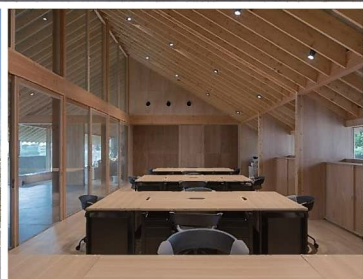
各保育室を結ぶ廊下は外部廊下とし、建具の枚数を最小限とすることでコストダウンを図った。外部廊下に面する保育室の建具は、軒先より約3m程内側にあり、ほとんど雨掛かりがないことから全て木製建具とし、最も頻度高く手に触れる部分を木の素材として、木温もり・柔らかさを感じられる部分とした。廊下と保育室の間は床に20mmのレベル差をつけることにより、木製建具の下端隙間(戸車部分)からの台風時の風雨の吹き込みを防ぐ設計としている。

写真撮影：イクマサトシ Techni Staff

木質化の部 優秀賞

さくさくファーム

所在地:行橋市



建築主 | 株式会社放作 代表取締役 藤川放作
設計者 | 株式会社松山建築設計室 代表取締役 松山将勝
施工者 | 株式会社放作 代表取締役 藤川放作
建築物の用途 | 店舗兼事務所
構造・規模(階数) | 木造・地上1階
延床面積 | 299.58㎡

設計趣旨

自然素材にこだわった地域食材の展示室と建設事務所の複合施設である。

自然や地域、人と真摯に向き合う建主や周辺環境と調和する建築を模索した結果、自然素材である木造建築で構成し、様々な活動を行う建主のエネルギーや、往来する人々の交流等、この地域のあらゆる活動をひとつの大屋根で包みこむ建築を目指した。

平面計画は、建物の半分以上が地域に開放され、前面道路側には地域食材展示室や、交流の場として用意された半屋外の土間空間を配置し、後方のオフィスも全て開放する事で、職員自ら地域活動に積極的に関わっていく構成が図られている。

内部空間は主要な柱梁の軸組みを現し、大屋根全体で面剛性を高め水平梁をなくすことで、地域に開放された軽やかで気積の大きな空間を実現している。

また、建主の倉庫で行き場を失っていた杉板や角材を、外壁の下見板や地域食材展示室の什器やベンチに活用することで、市場価値がつかなくなった木資材を活かし、自然素材や地域の資源を大切に建主の活動に共鳴した設えとしている。

この大きな屋根の木造建築が、多様な周辺環境を包みこみ、この地域の発展や発信、交流の拠点となることを願っている。

木質化の部 優秀賞

方眼の間

所在地:北九州市戸畑区



建築主 | 個人
設計者 | 古森弘一建築設計事務所 代表取締役 古森弘一
Atelier742 代表 高嶋謙一郎
施工者 | 山下建設株式会社 代表取締役 山下辰信
取締役・棟梁 與本篤史 大工棟梁 浦田昌鷹
建築物の用途 | 住宅
構造・規模(階数) | 木造・地上1階
延床面積 | 232.70㎡

設計趣旨

一間取りは施主が決める— 最初の打ち合わせで建主夫婦から方眼紙に描かれたいくつかの平面図を受け取りこのプロジェクトは始まった。その平面図を詳しく説明してもらおうと家族4人で議論を重ねた楽しそうな痕跡が散見されたため、極力その想いを実現したいと考えた。そこで、設計の議論を進めやすくするために三尺の方眼を天井に可視化することを提案した。子どもがいる家族にとって、この数年での生活の変化は免れない。その変化に対して、呼応できる住宅を目指し、柱・壁を容易に移動でき改修のしやすい和工法(在来工法)を確立するため初期段階から構造設計と大工を巻き込み検討を重ねた。

部材の種類を極力少なくし、小さな部材の集合体で構成することを心がけた。柱は105×105、格子梁は90×45、格子梁に貼る合板はOSB12mmまたは構造用合板12mm、筋交い桁は105×210のみで構成し、全体で効かせることを目指した。構法では、新しさを提案しつつ、材料は流通材を用いることで普遍的な木造住宅となり、金物も特殊なものを用いておらず、改修のしやすさに繋がっている。

施主・設計者・施工者が密に連絡を取り合い、集まれる距離間だからこそ、これまでにない新しい在来工法を考えることが可能となった。計画段階から積極的に「使い手」や「作り手」を交え建築をつくっていく事で建築がもっと多様に、もっと自由になっていって欲しいと思う。

写真撮影:大森今日子

特別賞



写真撮影: 富谷正弘



写真撮影: 撮影者: 針金洋介(空撮以外) 撮影者: 兼田成之助(空撮)

筑紫工業 新社屋 所在地: 那珂川市

建築主 | 株式会社筑紫工業 代表取締役 新内一秋
設計者 | 株式会社ブルク 代表取締役 池松正剛
施工者 | 株式会社大匠建設 代表取締役 井上真一
建築物の用途 | 事務所

構造・規模(階数) | CLTパネル構造・地上3階
延床面積 | 592.80㎡

設計趣旨

平成29年7月の九州北部豪雨災害の被災地である、添田町・東峰村を訪問し、山林が崩落、その流木が川をせき止め、町や住民の生活を破壊している状況に衝撃を受け、当社が所在する那珂川市の山林と豊かな地域資源を生かすとともに、災害が発生しない地域づくりを考える契機にしたいという思いから、那珂川市産杉を使用したCLTパネルで社屋を作る計画を始めた。

全フロアで、CLTパネルのもつ木の素材感を生かした空間づくりを行うことができるよう設計を進め、可能な限り壁面仕上げはCLT現しとし、木目の美しさや木の優しい肌触りが感じられることで、建築物を利用する全ての人々に心地よい空間を提供できるようにした。杉集成材CLTパネル工法により建設された当該建物は、製造の際のCO2発生量を抑えられるだけでなく、適切な解体をする事で移築再利用が出来るなど、再資源化を可能にし、建築廃棄物を将来に残さない。「SDGs」を具現化させ、次世代にも受け継いでいける環境に配慮した建物を目指した。今後、建築物全体をショールームとして活用し、木造建築物の素晴らしさを多くの人に知ってもらうことで、普及につなげていく。

古民家ヴィラ あんたげ 所在地: 朝倉郡東峰村

建築主 | 東峰村
設計者 | 納谷建築設計事務所 納谷学、納谷新
OYA/岡田祐介建築設計事務所 岡田祐介
施工者 | 株式会社 南里住建 代表取締役 南里一仁
建築物の用途 | 簡易宿泊所

構造・規模(階数) | 木造・地上1階
延床面積 | 152.59㎡

設計趣旨

古民家を宿泊施設にリノベーションし、高齢化による棚田や景観の保全をしながら、竹地区に新しい仕事を創出しようという試みである。既存の古民家は、その棚田の中で増改築を繰り返しており、我々は、この古民家を本来の姿に戻し、床のおおよそ1/3ほどにあたる部分に、上下の棚田を繋ぐ土間空間を挿入することを提案した。土間空間は既存の天井を抜き、梁レベルに口の字型の水平補強を施し、古民家が本来内包している小屋裏空間を大きな吹き抜け空間として表出させました。古民家特有の勾配屋根の下、利用者は大きく丸太梁が飛び交うダイナミックな空間に包まれる。土間空間の南北の壁は開放して内部からも石垣が見え、棚田の中にいることを身体で感じることができ、いずれの空間でも棚田の景観を楽しみ、棚田を流れる風がそのまま自然と吹き抜けるように、開口を計画している。「あんたげ」とは、地元の方で「あなたのうち」という意味で、東峰村復興事業の旗手として、多くの利用者と村民を繋ぎ、コミュニティの場となることを願っている。

奨励賞



写真撮影: 八代写真事務所

浦志の家 所在地: 糸島市

建築主 | 個人
設計者 | 松本設計 代表 松本孝充
施工者 | 松島建設 代表 松島進二
建築物の用途 | 住宅

構造・規模(階数) | 木造・地上2階
延床面積 | 79.49㎡

設計趣旨

糸島市街地の南東角地に建つほぼ平屋の住まいである。深い軒と外壁のくすんだ色が新築然としたものではなく、もう何年もそこに建っているかのような雰囲気を感じ出している。

内部は大きなワンルーム空間であるものの、南側に広く設置したベンチや地窓から庭を眺められる小さな和室、開放的な勾配天井で繋がったロフト等、心地良い居場所を随所に配した。南側の大口は内外の境界を曖昧にし、豊かな緑を持った外部空間を内部に取り込むことが出来る。外壁や軒天、内部天井、床などは九州産の木材とすることで、地産地消による地域活性化にも寄与出来、玄関ドアや一部サッシも木製とすることで、経年変化を楽しむことが出来るものとした。外部使用した県産の杉材は赤身を選別し、深い軒によって守られるようにした。耐震性や自然災害から身を守り、家族が夏涼しく、冬暖かく快適に暮らすことの出来る高性能な建築である。小さいながらも性能と意匠のバランスがとれた、内外一体となる居心地の良い居場所が点在する住まいとなった。



写真撮影: 小川重雄

春日どろんこ保育園 所在地: 春日市

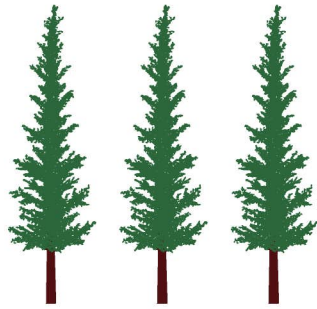
建築主 | 社会福祉法人どろんこ会 理事長 安永愛香
設計者 | ユニップデザイン株式会社 代表取締役 房前寿明
施工者 | 株式会社北洋建設 代表取締役 脇山章太
建築物の用途 | 保育園

構造・規模(階数) | 木造・地上2階
延床面積 | 1049.85㎡

設計趣旨

園舎内部では2フロアでも園児の行動や雰囲気や分断されないよう、自由に行き来のできる保育室内の専用階段や吹抜け・ネット遊具を設け、上下階がつながる空間をつくることで、異年齢が一つの屋根の下で共に暮らすインクルーシブ保育の実現を目指した。

園庭で活動する機会が多い、3～5歳児の保育室は1階に設け、縁側を介して南側の園庭に裸足で駆け巡ることができるようにしている。0～2歳児保育室は2階に設け、乳児でも園庭を眺めることができるよう、サッシは床レベルから高さを大きくとり、連窓のファサードとした。園庭と立体的に繋がるように2階にも広いデッキスペースを設け、明るく開放的な半屋外スペースを計画し多目的に利用できる。保育室はいわば、子どもたちが自由に行き来できる「ひとつの大きな家」で、外装や腰壁、床など、子どもたちが直接触れる場所の木質化は必須だと考える。



2021 第8回福岡県木造・木質化建築賞

令和4年3月

福岡県農林水産部林業振興課木材流通係

TEL092-643-3549 FAX092-643-3541

<https://www.pref.fukuoka.lg.jp/gyosei-shiryo/mokuzou8panfu.html>

この冊子の用紙は、福岡県産の間伐材を使用しています。



福岡県行政資料	
分類記号	所属コード
PF	4701002
登録年度	登録番号
03	0004